

主 題：栄光の王とはだれか

聖書箇所：詩篇24篇

テーマ：栄光の王の前にふさわしい礼拝をささげる

今朝、皆さんとともに学びたいみことばは、詩篇24篇です。聖書をお持ちの方はどうぞお開きください。内容に入っていく前に、まずみことばをお読みします。

詩篇24篇 ダビデの賛歌

「:1 地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは【主】のものである。:2 まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。:3 だれが、【主】の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。:4 手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。:5 その人は【主】から祝福を受け、その救いの神から義を受ける。:6 これこそ、神を求める者の一族、あなたの御顔を慕い求める人々、ヤコブである。:7 門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。:8 栄光の王とは、だれか。強く、力ある【主】。戦いに力ある【主】。:9 門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。:10 その栄光の王とはだれか。万軍の【主】。これぞ、栄光の王。」

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル、皆さんもこれまでに一度はこの名前を聞かれたことがあるのではないかと思います。ヘンデルは教会の歴史においても、最も優れた作曲家のひとりとして扱われる人物でした。もしその名を全く知らないという方がおられたとしても、彼の代表曲の一つである、ヘンデルの『メサイヤ』という曲は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。もしなければ、きょう帰って聴いてみてください。このメサイヤという曲は、1741年、今から約280年も前、イギリスのダブリンで初めて演奏され、その2年後となる1743年には、その時のイギリスの国王ジョージ2世の前で演奏されることとなります。その時の演奏がなされた様子を、ある著者はこのようにわかりやすく描いてくれていました。「『全能の主なる神が君臨される』そんな力強い言葉を含む『ハレルヤ・コーラス』が歌われた時、思いがけないことが起こった。ジョージ2世が自ら立ち上がり、敬意を示されたのだ。すると、観客も一斉にそれに倣った。そして、彼らは天におられる偉大なお方、地上の王を含め、全てのものを支配されている真の王を覚えながらコーラスの間、ずっと立ち続けたのだ。それ以来、今日に至るまで『ハレルヤ・コーラス』の部分では常に起立することが慣習となっている。」この時、なぜ王様が立ったのかについては諸説あります。しかし、今を生きる私たちにとって、この時の王様や観客の姿から学ぶべき大切なことがあります。それは、世界の全てを支配する主権者、王の王である方を覚えるときに、私たちに最もふさわしい応答は、この方に心からの称賛と敬意を表すことだ、ということです。神様の偉大さを目の当たりにすればするほど、この方の前にへりくだって礼拝をささげることこそが、私たちにとって自然な態度だということです。

では、少し考えてみてください。主を知り、主を愛する礼拝者として今を生かされている私たちひとりひとり、はたしてそれにふさわしい歩みをしているのでしょうか？そのような礼拝者として、日々変えられ続けているのでしょうか？J. I. パッカーも自身の著書『神について』の中で、こんなことばを残していました。「クリスチャンの神に対する信頼と礼拝をささげようとする本能は、神の偉大さを知ることによって、非常に力強く掻き立てられる。しかし、今日のクリスチャンにはこの知識がほとんど欠けている。そして、それが私たちの信仰が弱く、礼拝が力強さに欠けていることの一つの理由なのである。」

これから見ていく詩篇 24 篇。ダビデはここで、主がどれほど偉大な存在なのかを、改めて私たちに教えてくれています。栄光に輝く王である主の姿を三つ、ここに描いてくれているのです。

●歴史的背景

この詩篇の歴史的背景については、学者たちの間でも色々な考え方があります。多くの人々は、ダビデがイスラエルの王であった時代、オベデ・エドムの家からエルサレムへと契約の箱を運び出す際に、この詩篇が読まれたのではないかと考えていたりもします。その時の様子については皆さんのレジメにも記しておきましたが、Ⅱサムエル記 6：12－17 に見て取ることができます。ただし、これが確実にそうだと言えるかどうかについてはよくわかってはいません。ですから、実際にどんな歴史背景の下でダビデがこの詩篇を記したのかについては、私たちはよくわからないのです。

しかし確実に言えることは、ダビデはここで、強大な力を持った王の姿を覚え、そして、この方にふさわしい喜びにあふれた礼拝をささげている、ということです。栄光の王がどれほど偉大な存在かを知ることが、彼の心のうちにその方を崇める思いを強く掻き立てていたのです。きょう私たちが望むことも同じです。ここに描かれている栄光に輝く王である主の三つの姿を私たちは学んでいこうとしています。ですから、その真理を覚え、ますます主を愛し、主にふさわしい礼拝をささげる者としてともに成長していきましょう。このみことばを通して、どんなにすばらしい主を今私たちがたたえることができるのか、その喜びと感謝を改めて考える助けになることを心から祈っています。

○栄光の王とはだれか：三つの姿

さて、栄光の王の一つ目の姿が 1－2 節に描かれていました。もう一度、みことばを見てください。1 節からこのように記されていました。「1 地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは【主】のものである。2 まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。」

1. 栄光の王はすべてを支配されているお方 1－2 節

栄光の王の一つ目の姿は、栄光の王は「すべてを支配されているお方」だということです。1 節に「地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは【主】のものである。」と書かれていました。ここで「地」ということばが出てきていました。「地」とは、この地球全体のことです。次に「それに満ちているもの」ということばが出てきました。「それに満ちているもの」とは、その地球全体に存在しているすべてのもののことです。つまり、地球全体とその中に住んでいるすべてのもののことを指しているのです。詩篇 50：10－12 にもこのように記されています。「10 森のすべての獣は、わたしのもの、千の丘の家畜らも。11 わたしは、山の鳥も残らず知っている。野に群がるものもわたしのものだ。12 わたしはたとえ飢えても、あなたに告げない。世界とそれに満ちるものはわたしのものだから。」この地上を生きるすべての生き物、鳥や魚、また植物、山や川や地や空に至るまで、すべてのものが神様の所有物だ、と言われているのです。またここには「世界とその中に住むもの」ということばも出てきていました。「世界とその中に住むもの」とは一体何のことでしょうか？これも同じことです。神様は、全世界とその中に住むすべてのものの所有者なのだ、ということを強調していました。ですから、ここでダビデが言わんとしていることは明白でした。それは、神様がこの世界の所有者であり、すべてを思いのままに支配されている主権者だ、ということです。この地上に住むすべての人もそうです。私もそうだし皆さんひとりひとりもそうです。富んでいる人も貧しい人も、強い者も弱い者も、すべての国もすべての民族も同じです。神様の御手のうちに存在していないものは、一つとしてないのです。

思い出してみてください。かつてそのことを忘れた人物がいました。バビロンの王であったネブカデネザルがまさにそうでした。彼はある時、宮殿の屋上をひとり歩いていました。その時に、こう口にしたのです。ダニエル 4：30 にこのように記されています。「この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」神様の存在を忘れていました。彼は自分の成し遂げたことで高ぶり、自分の威光や権力というものを大いに誇りとしていました。

しかし、そんな彼の傲慢なことばがまだ彼の口にある間に、神様は彼にこう告げられたのです。ダニエル 4 : 31 - 32 「:31 「…ネブカデネザル王。あなたに告げる。国はあなたから取り去られた。:32 あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べ、こうして七つの時があなたの上を過ぎ、ついに、あなたは、いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなう者にお与えになることを知るようになる。」」と。神様は、どんなに力を持った王様よりも知恵のあるお方でした。この方こそが、すべてをご自分の望むままに扱われる権威を持つ偉大なお方だったのです。すべてのものがこの方の支配下にあり、すべてのものがこの方に従うべき存在でした。

でも、ある人はそれを聞いて思うかもしれません。一体どうして神様がすべての所有者であるということが出来るのだろう？何の根拠があって、神様がありとあらゆるすべてのものを支配されている、などと言えるのだろう？…と。もしそんなふうに思われた方があるなら、ダビデはその答えを 2 節に与えてくれていました。「まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。」と。なぜ神様がすべての所有者なのか？それに対する単純で明白な答えは、この方がすべてのものを造られたからだ、ということです。神様がこの世界のすべてを造られた創造主であるからこそ、そこに住むすべてのものを思いのままにする権威を持っておられました。皆さんもよくご存知の通り、神様のことばであるこの聖書を見れば、聖書は、「初めに、神が天と地を創造した。」（創世記 1 : 1）ということばで始まっています。そして私たちが創世記 1 章を読んでいけば、このようなことばを見るのです。「光があれ」「水と水との間に区別があれ」「乾いたところが現れよ」「生めよ。ふえよ。地にふえよ。」と…。神様はそのようなことばだけをもって、この世界のすべてを造られました。ネヘミヤ 9 : 6 - 7 には「:6 ただ、あなただけが【主】です。あなたは天と、天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、海とその中のすべてのものを造り、そのすべてを生かしておられます。そして、天の軍勢はあなたを伏し拝んでおります。:7 あなたこそ神である【主】です。…」こうして聖書を見ればくり返し、この世界が創造主である神様によって造られた、ということを見て取ることができます。だからこそ、この神様の支配には限りなどないのです。この世界のすべてのものを造られたからこそ、この方だけがご自身の望まれるようにすべてのことをなす権威をお持ちでした。

では、どうでしょう…私たちは、神様がすべてのことを支配しておられるということを知識としては知っているでしょう。神様が主権者なのだということを、知識として私たちは持っているでしょう。ではその知識は、私たちの心に、主に対する信頼を、主に対する礼拝をしたいという思いを強く掻き立てるものでしょうか？

時に、私たちの目にはそのように見えないことがあります。色々な問題が突然起こっているかのように思えることもあります。しかし私たちは、そんなときこそ覚えることができるのです。“この世界のすべてを創造された主はすべてを支配されているお方だ”ということを…。神様はこの世界の主権者です。皆さん、この方はきのう主権者になったのではありません。数年前からすべてを支配するようになったのではありません。この方は皆さんが生まれる前から、この世界が誕生するその前から永遠に変わらず主権者として存在されているお方です。だから、この方の御手のうちにあって、“偶然”などというものは一つとしてないのです。この方の御手のうちにあって“運”などというものは一つとしてないのです。神様が知らないうちに、見ていないうちに起こるものなど一つとして存在しません。この方は良いときだけ支配されていて、悪いときは支配されていないような存在でもありません。歴史上において、地球上のどこにあって、それがどれほどささいなことであろうとも、それがどれほど強大なことであろうとも、どんな状況であったとしても、主はすべてのものを昔も今もそしてこれから先も変わらずに支配されている主権者なるお方です。どんな人間であろうとも、どんな国や国家であろうとも、この方の御手のうちに存在しないものは一つとしてないのです。この方がすべてを造られたからです。

またこの方のご計画のうちには、誤りや狂いというものも一つとしてありません。この方の計画を邪魔することができる者はひとりとしていないのです。この方の御手を押さえて、「それは間違っている」などと言える者はひとりもいません。主はすべてのことをあらかじめ決めておられて、すべてのことをご自身の定めた通りに成し遂げられるお方です。そして、主はそれらすべてのことを、ご自身の目的のために、ご自身の栄光を現すために行われるのです。覚えなければいけないのは、私たちの主はただの傍観者ではない、ということです。この方こそが、すべてをその力強い御手をもって支配しておられる主権者なのです。これが、決して揺るぐことのない真理です。これが、私たちがほめたたえることができる主の姿です。私たちはこのようなお方に信頼して歩むことができるのです。そのことを私たちが知っているのなら、私たちは、この方にふさわしい礼拝をささげているのでしょうか？すべてのことを支配されているこの方に対して、私たちはふさわしい信頼を言い表しているのでしょうか？皆さんもよくご存知のヨブは、多くの酷い苦しみを受ける中であって、主の偉大な力と知恵を目の当たりにし、このように述べて主を礼拝していました。ヨブ記42：2に「あなたにはすべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。」と。では、私たちはどうでしょう？

2・栄光の主は聖なるお方 3－6節

次に、栄光の主の姿として二つ目に描かれていたのは、この方は「聖なるお方」だということです。そのことが3－6節に記されていました。3節には、まずこのようなことばが続いています。「だれが、【主】の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。」ここでダビデはある疑問を投げかけていました。皆さん、よく文脈を考えてみてください。彼は1－2節で、神様が世界のすべてを造られ支配しておられるお方だということに触れていました。神様がどれほど力強い存在かを心に覚えていたのです。そんな彼が、ごく自然な問いを抱くのです。神様がこれほどすばらしく、これほど偉大なお方であるなら、一体だれがこの方の前に立つことができるのだろうか？これほどまでに誉れと称賛に値するお方であるなら、一体だれがこの神様の前に出て礼拝をささげることができるのだろうか？…と。どうです？とても正直でへりくだった態度だと思いませんか？彼は強大な権威を持つ王の前に、自分の小ささを覚えていたのです。そしてこの問いは、私たちにとっても、非常に重要なことを教えてくれます。それは、この主の前にはだれしもが気軽に立つことができるわけではない、ということです。すべてを支配されているお方、この方は同時に、完全できよいお方であるからこそ、その聖なる所に立つためには、ある条件を満たさなければその前に立つことが許されませんでした。その条件に関して、ダビデは4節で四つのことを挙げてくれています。言い換えれば、これら四つの基準を満たした者だけが、神様の前に立つことを許された者だということです。

●聖なる神様の前に立てる者：四つの条件 4節

ではどんな条件、どんな基準だったのでしょうか？4節にこのように記されています。「手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。」

a) 手がきよい者

一つ目の条件として挙げられていたものは、「手がきよい者」であることでした。もちろんこれは単純に、手が泥や埃といったもので汚れているというような話をしているのではないことは、皆さんもよくわかると思います。ここでの「手」というものは、私たちの行動やふるまいを比喩的に表現しているものでした。周りの人々が目にすることができる外側の行いのことを「手」と言っていたのです。つまりここで求められているのは、私たちのふるまいにおける完全な正しさでした。ふるまいにおいて完全な正しさが求められていたのです。「手」についてイザヤ1：15－16でも、人々に対するこんな非難が記されています。「：15 あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。：16 洗え。身をきよめよ。わたしの前で、あなたがたの悪を取り除け。悪事を働くのをやめよ。」と。ですから、聖なる神様の前に出ようと

する者は、外側のふるまいにおいて正しい者であることが絶対でした。私たちが耳で何を聞くのかも、口で何を話すのかも、目で何を見るのかも、からだで何をするのかも、それらすべての点において、きよい者であることが欠かせない条件だったのです。

b) 心がきよらかな者

次に二つ目の条件として挙げられていたのは、「心がきよらかな者」でした。ここでの「心」とは、先の「手」とは違って、今度は、人が内側に抱く思いや考え、意志や動機のことを表しています。つまり、求められていた条件は、外側で何をするかだけでなく、どんな思い、どんな心、どんな内側でそれをするかだということです。外側をいくら取り繕っていたとしても、その内側がきよくなければ、神様の前には大問題であるのです。思い返せば、まさにこの点においてイエス様も律法学者たちのことを責め立てておられました。マタイ 23 : 25 - 26 を見れば、このようなイエス様のことばを見ることができます。「:25 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。:26 目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。」聖なる神様の前に出ようとする者は、人の目に見える行いにおいて正しい者であるだけでなく、人の目には見えない心の部分においても、きよい者であることが欠かせない条件だったのです。そして皆さん、ここで終わりではありません。

c) たましいをむなしいことに向けない者

続けて三つ目の条件として挙げられていたのは、「たましいをむなしいことに向けない者」でした。たましいをむなしいことに向けない、とはどういうことでしょうか？ここで「たましいを…向け」ない、ということばが用いられていますが、これはヘブライ語にある言い回しの一つで、「たましいを向ける」と言えば、「何かを望む」とか「何かを強く求める」といった意味を持っているのです。またもう一つ出てきた「むなしい」ということばには、「偽り」とか「価値のない、空っぽの」といった意味が含まれるだけでなく、ある箇所を見れば、これは「むなしい偶像」といった形で用いられていたりもします。つまりこれらのことをまとめて考えると、たましいをむなしいことに向けない人物というのは、神様以外の何か、本当に価値あるものではない、何かむなしいものを願わない人物だということです。もっと言えば、たましいをむなしいことに向けない人物とは、神様以外の何か偶像を礼拝する者ではない、ということです。ここで「偶像を礼拝する」と聞いて、ある人は、この点において私は大丈夫かもしれない、偶像礼拝は私には関係ありません、と思われるかもしれませんが。確かにこの偶像礼拝というものが、金や銀、銅や木などで造られた像などに手を合わせることを指しているのなら、そうかもしれません。しかし私たちが覚えなければいけないのは、偶像礼拝というのは、そういった像を拜むことだけでなく、神様以外の何かに心を向けることも含まれる、ということです。どういうことか？この点においてケン・サンデいう先生は非常にわかりやすい説明をしてくれています。偶像礼拝に関して自身の著書でこのように述べています。「どんな時であろうと、私たちが自分の幸せや満足、安心を手にするために、神様以外の何かを望み、神様以上に何かを恐れ、神様ではない何かに信頼を置くのであれば、それは偽りの神を礼拝していることに他なりません」と。

私たちの周りは確かに良いものであふれています。食べ物やお金も、健康や趣味も、また仕事も…挙げればキリがないほどたくさんのすばらしい祝福を、神様は私たちに与えてくださっているのです。しかしどんなに良いものであろうと、私たちの心の目を本来向けるべき神様ではなく神様以外のものに向けるのであれば、それは偶像礼拝になるのです。聖なる神様の前に出ようとする者は、むなしいものに心を向けるのではなく、何よりも愛すべき神様を愛する者でした。それが欠かせない条件だったのです。

d) 欺き誓わなかった者

そして最後四つ目の条件として挙げられていたのは「欺き誓わなかった者」でした。要するに、欺き誓わなかった者とは、人をだまそうとするのではなく、自分の立てた誓いに対して忠実であろうとする人物だということです。以前に見た詩篇 15 篇でも、同じようなことが記されていました。詩篇 15 : 4 の後半部分に「…損になっても立てた誓いは変えない。」と。聖なる神様の前に出ようとする者は、たとえそれが自分の不利益になって犠牲を伴うことがあろうとも、自分の立てた誓いやことばを最後まで誠実に守り続ける者でした。自分のことばに誠実である者だと。それが欠かせない条件だったのです。

では、少し立ち止まって考えてみてください。一体だれが聖なる神様の前に立つことができるのか？ みことばが教えてくれていたのは、少なくとも四つのことでした。外側のふるまいにおいていつも正しく、内側の心においても聖く、むなしいことに心を向けずに、いつも神様を愛し、自分の誓いに対して忠実である者、それが聖なる神様が求めておられた基準、条件だったのです。聖い神様の前に立つには、文字通り完全な正しさ、きよさが求められていました。この方の前には一つの汚れも許されなかったのです。そうだとすれば、私たちのうちの一体だれがこの神様に受け入れられるのでしょうか？ 一体だれがこの神様の前に出て礼拝をささげることができるのでしょうか？ 答えは、だれもない、ということです。私たちのうちのだれひとりとして、今挙げられていた四つの条件を自分の力で完全に満たすことができる人などいません。だからこそ、私もあなたも本来であれば、この神様の前に出ることなど到底できない存在でした。私たちの行いによってでは、神様の完全で正しい基準を満たすことなど絶対にできなかったのです。だからもし、ここでみことばが終わっていれば、私たちには希望などいっさいありませんでした。でも、そうではなかったのです。

みことばは続いていきます。5-6 節「:5 その人は【主】から祝福を受け、その救いの神から義を受ける。:6 これこそ、神を求める者の一族、あなたの御顔を慕い求める人々、ヤコブである。」ここで注目してほしいのは、5 節で、特に、だれから「祝福」が与えられ、だれから「義」が与えられているのか、ということです。それは、「【主】」でした。主が祝福を与え、救い主が義を与えてくださるのです。言い換えれば、聖なる神様の前に立つことのできる権利を与えてくださるのは、ほかのだれでもない神様だということです。本来であれば、どう考えても主の前に受け入れられるはずなどない罪に汚れた私たちが、神様の前によしと認められたのは、私たちの行いではなく、ただ神様の恵みでした。そのことをダビデもわかっていました。救いは、行いによるのではなく、主からいただくもの、主に対する信仰によるものであると。神様の前に悔い改めてへりくだって来る者には、神様が贈り物として、救いを、義を与えてくださるのです。そしてこれは、今を生きる私たちにとって、何よりもすばらしい知らせです。喜びをもたらす知らせです。私たちに対して、主が義を与えてくださるのです。一体どのようにしてか？ それは唯一、神様が定めた基準を最初から最後まで完璧に歩んだイエス・キリストによってでした。

イエス様はこの地上において完全な生涯を歩まれました。この方は汚れた行いをしたこともなければ、一度としてその心において罪を犯すこともありませんでした。むなしいことに心を向けることなどなければ、決して欺き誓うこともありませんでした。この方はすべての点において完璧な人生を歩まれたのです。そしてこの完璧なお方が、完全で義なるお方が、私たちの罪を負って代わりに十字架の上で死んで下さいました。本来であれば、罪に汚れた私たちひとりひとりが受けるべき神の御怒りをその身に受けて、尊い犠牲をもって御怒りをなだめ罪を赦して下さっただけでなく、この方を信じ受け入れる者にご自身の義を与えて下さったのです。このようにパウロも説明していました。Ⅱコリント 5 : 21 に「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」またヘブルの著者もこのように述べていました。ヘブル 10 : 19-22 で「:19 こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。:20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださっ

たのです。:21 また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。:22 そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。」と。人はだれも、自分の知恵や力、熱心な行いによっては聖い神様の前に出ることができません。罪にまみれた私たち、それは不可能だったのです。しかし私たちの努力や行いではなく、キリストを通して、この方を信じる信仰によって義とされた者には、神様の前に大胆に出ることをよしとされました。だからこそ、聖なる神様の前に出て私たちが礼拝をささげることができるということを覚えるときに、私たちは感謝しなければいけないのです。これはただ神様の恵みのだと。スポルジョンもこのように言っています。「聖徒は救いを必要とし、神から義を受けます。祝福は、救い主である神からの恵みです。聖徒は与える者としてではなく、受ける者として主の山に登ります。自分自身の功德ではなく、受けた義を身につけているのです。」自分たちの行いによっては、決して神様の完全な基準を満足させることなどできなかった私たち。そんな私たちが今、キリストの完全な義にあって礼拝をささげることができるという特権に与っているのです。そのような喜びが私たちにはあるのです。

もしまだ主を知らない方がこの中におられるなら、この主の前に出ることです。信仰によって、救い主イエス・キリストがあのかross架上で成し遂げてくださったみわざを自分のこととして受け入れることです。そしてこの方のために生きる人生を始めてください。ここに喜びがあるのです。

そのことを知っている皆さん、恵みによって救われ、キリストによって義とされたというその真理に私たちが心を留めるのであれば、その知識は、私たちの心に、主にますます信頼し礼拝したいとの思いを強く掻き立てないでしょうか？ 私たちはだれひとりとして主の前に立つことはできませんでした。キリストがおられなければ、主から永遠に引き離された存在だったのです。あふれんばかりの恵みを与えてくださったこの主の姿を私たちが覚えるなら、この方の前に礼拝をささげていきたい、さらには、この方が喜ばれることを、聖さを何よりも追い求めて歩んでいきたい、とならないでしょうか？ 6節にはこのようなことばが繰り返されていました。「これこそ、神を求める者の一族、…御顔を慕い求める人々、…」慕い求める…と。これまでも何度も言っていますが、大切なことは、行いがその人を救うわけではありません。しかし本当の救いというものは、その人の歩みのうちに必ず良い行いを生み出す、ということです。救われた者たちは神様を愛するがゆえに、神様の前にきよさを追い求める者として生きていこうとします。御顔を慕い求める者として、主の前を、行いにおいても心においても主に喜ばれる者に、と願って歩む者として生きていこうとするのです。

思い返せば、ここに登場しているヤコブも決して完璧な人物ではありませんでした。彼も何度も何度も過ちを犯しました。しかし砕かれた後、主を信じ、主の御顔を慕い求める者として歩んだのです。では、私たちはどうでしょう？ 私たちは、恵みによって、信仰によって、キリストによって救われた者として主の前を喜んで歩み、この方が受けるにふさわしい礼拝をささげる者として歩んでいるのでしょうか？

3. 栄光の王はすべてに勝利するお方 7-10節

そして最後三つ目の姿として描かれていたのは、この方は「すべてに勝利するお方」だということです。そのことが7-10節に記されていました。この7-10節を見るときに、多くの学者たちはこの部分に二つの異なる集団による交渉がなされていると考えています。この二つのグループがそれぞれの声に応答して交互に歌い合っている様子を見て取ることができるのです。7節から見てください。最初に、門の外にいる者たちが大きな声で歌っている様子を見て取ることができます。こんな声が聞こえて来ました。「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。」すると、その声が鳴り響いている中であって、その声に呼応して門の内側にいる者たちが問いかけます。

「栄光の王とは、だれか。」その問いに対して、門に向かって行進して来る者たちは答えます。「強く、

力ある【主】。戦いに力ある【主】。」一度目の合唱が終わりました。しかし、彼らの声はここで止まることはありませんでした。門に向かって行進を続ける者たちはますます大声で歌うのです。9節「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王がはいって来られる。」巨大な門はゆっくりと開かれていきます。その中で門の内側にいる者たちはさっきと同じ質問を問いかけるのです。その「栄光の王とは、だれか。」その問いに対して再び、行進を続ける者たちが答えていました。「万軍の【主】。これぞ、栄光の王」と。どうでしょう？これらのことばを目にする時に、ここに登場している人たちがどれほど歓喜に包まれ、喜びと興奮にあふれていたかを容易に想像できないでしょうか？彼らは自分たちが迎え入れようとしているその王が、どれほど偉大な存在なのかということをよく理解していたのです。少なくとも二つ、私たちもこの王の偉大さについて、彼らのことばから見て取ることができます。

まず、この王は、「栄光に満ちあふれた存在」でした。7－10節の短い間で、「栄光」ということばが5回もくり返されていたことに気付かれたかと思います。言い換えれば、この方こそが、栄光にあふれたお方だということです。この方こそが、権威ある称賛されるべきお方だということです。このような神様はほかにはひとりとしておられません。この方の栄光は決して軽く扱うことのできるようなものではない、力強く輝かしいものでした。この方は栄光にあふれた王なのだと。

また、この王は栄光にあふれた存在であるだけでなく、同時に、「戦いに勝利する力ある存在」でした。8節の後半に書いてありました。「強く力ある【主】。戦いに力ある【主】。」この方は、敵の前で恐れおののいているような弱々しい頼りない存在ではありませんでした。この方は、どんな戦いにも勝利をもたらすことのできる、強く力ある戦士でした。そしてそれに加えて、10節の最後にこんなことばが記されていたのです。「万軍の【主】。これぞ、栄光の王。」と。この方は万軍の主でした。この方こそが、天の大軍勢を引き連れて来られる、そのような王だったのです。

皆さん、このことを覚えて少し立ち止まって、イエス様の姿を思い返してみてください。一度目にイエス様がこの地上に来られた時、主はへりくだって仕える者として来られました。そしてそんなイエス様はひとりでした。覚えていますか？あのゲッセマネの園でご自身を捕らえに来た者たちのひとりに、打ってかかったペテロに対して、イエス様はこのようなことばを口にしておられました。マタイ26：53－54に「:53 わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとでも思うのですか。:54 だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」と。ここに記されている通り、イエス様はこの時、父なる神様に、十二軍団よりも多い御使いを配下に置いてくださるようにと願う権利がありました。そのことができました。しかし、そうはなさらず、その身をみずから敵の手に引き渡されました。そして、主はひとりで十字架にかかって死に、ひとりで墓に葬られた後、三日後に死を打ち破ってよみがえり、勝利者としてひとり天に凱旋して行かれました。しかし、イエス様がこの先、二度目にこの地上に来られる時、主はもうひとりではありません。この力強い勝利者であられる栄光の王は、天の軍勢を引き連れて帰って来られるのです。ヨハネは黙示録の中でそのことをこう表現していました。黙示録19：11－16にこうあります。「:11 また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。:12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。:13 その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。:14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。:15 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。:16 その着物にも、ももにも、「王の王、主の主」という名が書かれていた。」皆さん、これが私たちの待っている栄光の王の姿です。イエス・キリストが必ず再びこの地上に帰って来られます。そしてその時に、ご自分に逆らう

すべての敵に対して、完全な勝利を成し遂げられるのです。この方こそが、力ある万軍の主、王の王、主の主として君臨される真の勝利者でした。それがみことばが私たちに教えてくれる真理です。キリストは必ず戦いに勝利される栄光にあふれた王である、という真理に心を留めるのであれば、その知識は、私たちの心に、主をますます信頼し、ますます主を愛し主を礼拝したいという思いを強く増し加えるものではないでしょうか？

確かに、今私たちが周りを見渡せばさまざまな悪がはびこっていて、悪が善に対して勝ち誇っているような様子を見ることがあります。神様が愛する者たちを虐げられるように思えることを目の当たりにすることもあります。私たちひとりひとりも、罪を赦され、神様に喜ばれる者として歩んでいきたいと願っていても、罪との葛藤に負けて敗北してしまうことも、それに苦しむこともあります。しかし、それがいつまでも続くことはありません。この世界をすべて支配しておられて、聖く、正しく、すべての戦いに勝利される栄光の力ある王が帰って来られ、悪に対して完全な勝利を治められるその日がやって来るのです。そして感謝なことに、キリストにあって神の子どもとされた私たちも、この勝利とともに喜ぶことができるのです。すばらしいことだと思いませんか？私たちの愛する主は一体どれほど強大な力を持ったお方なのでしょう?!皆さん、この方が、私たちをその罪から救ってくださった王でした。この方が、どんなときにも私たちとともにいてくださる王でした。この方が、私たちがへりくだって仕える王でした。この方が、私たちが賛美をもって心から礼拝する王でした。すべての者が膝をかがめ、「イエス・キリストは主である」と告白するその日はやって来ます。栄光の王である偉大な主が、すべてを統治されるその日はやって来ます。そのことを私たちが知っているなら、このようなすばらしい主を私たちが知っているのだとすれば、私たちがなすべき最もふさわしい応答とは一体何でしょう？それは、この方に心からの称賛と敬意を表すことです。この方の前にへりくだって、この方にふさわしい礼拝をささげ続けることです。この方だけが栄光をお受けになるべきお方です。このような栄光の主を覚えながら、今週も主に仕える者として続けて歩んでいきましょう。